ビターチョコレート

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ビターチョコレート

【Ｎコード】
Ｎ１６３２Ｒ

【作者名】
神田春希

【あらすじ】
「なんなのよっ！」アタシは怒っていた。
最近サトシと交わした言葉は「おはよう」と「おやすみ」だけ。
気分転換に町を歩けば、そこは何故かお祭りみたいな雰囲気だった――。
乙女なアイリス、未だに暴走中です。

前編（前書き）

某サイトで描いた作品の改訂版。
やっぱり自分が書くアイリスは乙女です。

前編

なんなのよ！

ホント、サトシってばっ！！

アタシは最近のサトシについて怒っている。
『バトル馬鹿』を地で行くサトシが、最近ポケモンセンターの厨房に入り浸りなのだ。

――今日で三日目。

最近交わした言葉は「おはよう」と「おやすみ」だけ。

一体何が忙しいのかと厨房を覗こうとするも、彼の相棒のピカチュウが扉の前で行く手を阻む。

「ピカチュウ、ちょっとだけだから見せてよ」
ね、お願い！と言ってみても、かわいい顔とは裏腹に彼の意志は固く、ちらりとも中を覗くことは叶わなかった。

「なんなのよっ！　もうっ！！」

アタシは怒りのはけ口を見失って、ただひたすら街中を歩く。

ふと見れば、街中はちょっとしたお祭り騒ぎ。
赤やピンクのハート形の風船があちこちにくっついていて、キラキラとした派手なピンクの文字で『バレンタインデー』とかなんとか書かれてある。

「ねぇねぇ、本命チョコ買った？」
「うん！　でも……スキって言えるかな？」
綺麗なラッピングのされた箱を持った女の子たちが、キャアキャアと言いながらアタシの横を過ぎる。

「バレンタインデー？
ねぇ、キバゴ。それって何かな？　」
アタシはキバゴに尋ねてみるけど、キバゴも知らないみたいで「キバー……？」と言いながら首を傾げた。

「バレンタインデーって言うのは、好きな人に愛の告白をする日だよ」
不意に後ろから声を掛けられて、アタシは驚き振り向いた。
涼しげな表情でアタシを見るのは、アタシの旅仲間の一人、デント。

「好きな人？　」
「そう、好きな人に自分の思いのたけを伝えるのさ。
そして恋が叶ったら、二人は晴れて恋人同士になるんだよ」
「こ、恋人？！」

　そんなイベントがあったなんて、アタシ知らなかった。
じゃあ、さっきの女の子も好きな人に告白するんだ……。
で、なぜか浮かんでくるのはサトシの笑顔――。
って？！　なんでサトシ？？？！

いやいや。それはないでしょ？
子供なサトシにアタシが――アタシが――？！
そんな事を思っていると、デントはクスリと笑って「じゃあ僕は部屋に戻ってるから」と言うとさっさと行ってしまった。

アタシはそんなことないと否定してみたり、でも――とか思ってみたり……。
まとまらない考えをまとめようと必死だった。
「あれ？　ここは――？」
どこをどう歩いていたんだろう？
気がつくといつの間にか袋小路に仁王立ちしている。

「あらかわいいお嬢さん。
ちょうどあなたで満員よ。良かったわね」

ぐいっと腕を引っ張られて、驚くアタシとは裏腹に、声をかけてきたおねーさんはニコニコ顔で一軒のお店へとアタシを連れ込む。
おねーさんの肩にとまっている緑色の鳥ポケモンがアタシを見てにっと笑った気がした。
「ちょっと？！　なんなの？？」
そう言ったのだが、あれよあれよという間にエプロンとか三角巾とかを身に着けられた。
「じゃあ、大好きな本命彼に手作りのお菓子を作りましょう」

にっこりとほほ笑むおねーさん。
周りを見ると本気モードの女の子たちが気合を込めている。

「ねぇ、これって……？」

アタシは声をひそめて隣に居た女の子に聞く。

「あら？　あなた知らないで着たの？
ここは選ばれた女の子だけが入れるお店よ？
あなたが入ってこれたってことは、好きな男の子が居るんでしょう？
――ここで手作りすると、恋が叶うって有名なの」

女の子は可愛く微笑むと、がんばろうねとアタシに向かってちいさくガッツポーズする。

「こ、恋が叶うううっ？！」

アタシは顔が真っ赤になったと思う。
思うってのは鏡を見て確かめたわけじゃないから、なんだけど……
明らかにほっぺたは熱いし、目の前もふわふわとしちゃっている訳で……。

ポケモンで言うと『瀕死』みたいな状態でおねーさんの言う通りに体をただ動かした。

甘い香り漂うお店を後にしてアタシはポケモンセンターを目指す。
手には可愛くラッピングされた手作りチョコ……。

おねーさんには「あなたの恋は障害が多いけど、がんばってね！」と言われた。

あんなやつ恋愛対象で見てないしっ！と否定したんだけど、おねーさんはにっと微笑んでアタシの頭を優しく撫でる。
視線を感じて目線を上げると、さっきのポケモンがじっとアタシを見ていた。
その、心まで見透かされてしまいそうな視線にアタシは思わず目を逸らす。
もう……なんなのよっ……。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「ただいま～」
そう言って部屋の戸を開ける。
「お帰り。遅かったね」そう言ったのはデント。
「まぁ……ちょっとあって……」
アタシは何事もなかったかのように部屋に入る。
「あれ？　サトシは？　」
「あぁ、サトシなら、ほら……」
デントの視線の先にはもうすでにベッドでぐっすりと眠っているサトシ。
「さっすが、こんな早い時間に寝ちゃうなんて。
こっどもねぇ」
アタシはそう言いながらほっと胸を撫で下ろした。

……だって、今日はなんだかサトシを意識しすぎちゃって、どんな顔で会っていいのか解らなかったから。

それにしても、とアタシはサトシの顔を覗き込み思う。
ホントに全くサトシってば、何にも悩みありませんみたいな顔して寝ちゃって……。

ちょっとした悪戯心でアタシはサトシの鼻をつまんでみる。
すると彼はもぞもぞと動くと少し眉をひそめた。
何となく優越感を味わったアタシが手を離そうとしたその時だった。

「ひゃっ」

アタシは驚きのあまり、なんだか変な声を出す。

サトシの手がアタシの手をギュッと握って……そしてアタシの手の甲にサトシの唇が触れたのだ。

な、なに?!

アタシは偶然の出来事に身を固くする。

助けて欲しくてデントの方を見ると、彼は声を殺し肩を震わせて笑っていた。

中編

「おい、アイリス。起きろよ」

ゆさゆさと体がゆすぶられる。

誰――？

眠いんだから勘弁してよぉ――。

昨日はあいつのせいで眠れなかったんだからね……。

「なぁ――アイリスってばっ！」

じれったそうな声がアタシのまつ毛を揺らす。

肩に感じるのは、ちょっとあったかい、誰かの手――。

ゆさ、ゆさ、ゆさ、ゆさ、ゆさ、ゆさ、ゆさ、ゆさ、ゆさ、ゆさ……

――もう――しょうがないなぁ。

アタシは観念して、仕方なく目を開けた。

目に飛び込んできたのは、朝の光と、それに負けないぐらいのサトシの笑顔で――。

アタシは予想だにしてなかったその至近距離に、驚きのあまり身動きも出来なかった。

「おはよう！アイリス！やっと起きたなっ」

彼は体をアタシから離すと、真夏の太陽みたいな眩しい笑顔を見せる。

は、反則でしょ、それ……

サトシの肩越しにデントが見えた。
彼はアタシの気持ちを知ってか知らずか、また肩を震わせて笑っている。

っていうか、分別ある大人ならサトシがこんな起こし方をする前に止めてくれたっていいんじゃないの？　とアタシは思う。

「？　なんでデント笑ってんだ？　」

きょとん。とした顔でデントを見るサトシ。
アタシはそんな彼の顔を見て思わず胸がきゅっとなった。

鈍感で、ポケモン馬鹿で、子供で、熱血漢で――純粋。

もし、
もしアタシがポケモンだったら、
多分――いや、絶対
彼にゲットされたい――。

そんな事をぼんやりと思って、アタシはすぐさま首を振った。

な、何考えてるのよっ　アタシってばっ！

「キバゴ！　おはようっ」

「キ……キバキバ？」
アタシは誤魔化すように隣で寝ていたキバゴを抱きしめる。
急に起こされたキバゴは、眠たいのかごしごしと目をこすって、ふわ～と大きな口を開けてあくびをした。

「アイリス！　ドリュウズ出してくれよ」
「へ？　ドリュウズ？」
「ああ！　あいつに用事があるんだ」

アタシはサトシに言われるがままにドリュウズを出す。

……嗚呼。やっぱり、ね。

アタシが嫌いだと体全体で表現しているかのように、ドリュウズは穴を掘る姿のまま床にごろりと転がった。

寂しいという気持ちと、諦めの気持ちが交差する。
そんなアタシの事など気にも留めず、サトシはドリュウズの鼻先あたりにピンクの何かを差し出した。

ぴく。
ぴく、ぴく。

ドリュウズが揺れたと思ったら、急に普通の形態に戻ると、サトシの手からそのピンクの物をもぎ取り、さくりとかじった。

「うまいか？　ドリュウズ！」
にっこりと笑うサトシに、ドリュウズは素直にこくりと頷く。
「いっぱい作ったから、みんなで食べろよ！」
軽く頭を撫ですっと立ち上がると、サトシはキバゴに向かって「キ

バゴも食べろよ」とキラッキラの笑顔でほほ笑んだ。

「キバー！」

キバゴはアタシの腕からぴょんと飛んで、サトシの頭に乗ると「キバキ～」と甘えるような声を出してテーブルに飛び乗った。

テーブルの上には私たちみんなのポケモンが勢ぞろいしていて、おいしそうにお菓子（？）を食べている。

「それ、なぁに？　」

アタシはベッドから飛び起きると、まるで虫ポケモンが蜜に吸い寄せられるようにテーブルに近づく。

「サトシが作ったんだって。
ポフィンとポロックって言うらしいよ。興味深いよね」
デントがそう言うとサトシは照れ臭そうに笑った。

「サトシが作ったの？　」
「まあな！
――なぁピカチュウ。今回は上手にできたよな？」
「ピカチュっ！」

見つめ合う二人の笑顔に、ちょっと心奪われてしまった。
コロコロと表情を変えるサトシ。

時には厳しく、時には悲しく、時には甘い砂糖菓子みたいに柔らかく……。
ずっと見ていても飽きないな、とアタシは思っていた。

だから一緒に旅をしてもいいかな？　って思ったわけで……。

「アイリスにも、はいこれっ」

ずいっと私の前に現れたのは、お皿に乗った見たこともないお菓子。

「あ、アタシに？　」

目をぱちくりさせてサトシを見ると、彼は屈託ない笑顔でこう答えた。

「うん。アイリスに！
バレンタインだから！」

……

……

……

は？

い、今のは聞き間違いかしら？

アタシは目の前のサトシに冷静を装って聞き返す。

「バレンタイン……？」

「そう！　今日はバレンタインだろ！　」

彼はきっぱり、はっきり、くっきりと、大きな声でそう答えた。

『バレンタインデーって言うのは、好きな人に愛の告白をする日だよ』

昨日のデントの言葉がアタシの頭に響いた。

『恋が叶ったら、二人は晴れて恋人同士になるんだよ』

――ってことは、つまり、その、あの、これって……

あ、愛の告白?!

アタシはサトシからそのお皿を受け取ると、小さい声で

「あ、ありがとう」と言うのが精いっぱいだった。

後編

アタシがお礼を言うと、サトシは人懐っこい笑顔を浮かべた。

で、

アタシの隣に居るデントにももう一つのお皿を渡して

「デントにも！　はいっ！　バレンタインっ！！」とかなんとか言って、にっこり笑っている。

――

――――――――は？

サトシ、今、何て言った？

アタシの聞き間違いじゃなかったら……デントに向かって『バレンタイン』って……？！

ま、まさか！

サトシってばデントの事も愛してるの？！

アタシは驚きのあまりデントとサトシの顔を見比べる。

サトシは相変わらずニコニコしてたけど、デントはアタシの視線を感じたらしく少し困り顔になってた。

「ありがとう、サトシ。

――ところでサトシは今日バレンタインだって知ってたんだね」

「？　当然だろ？

あんだけ町の中にいっぱい書いてあるからな。

去年はうっかり忘れちゃったから、今年はオレ頑張ったんだぜ」
　得意げに言うサトシだけど、
あのさ、
私達、
去年はまだ出会ってもいないよね??
アタシの頭の中は益々混乱した。
……ちょっと、なんか、泣きそう……かもしれない。
「あ、そうだ。
アイリスはバレンタインを知らないみたいだから、サトシが教えてあげたらいいんじゃないかな?」
ふんわりとした笑顔でデントがそう言うと、サトシは益々得意げにアタシに向かってこう言った。
「アイリス知らないの?
バレンタインって言うのは、大好きな仲間におやつをプレゼントする日、なんだぜっ!」
は?
――なんか昨日デントが言ってたことと違うんだけど……?
「……まぁ、オレもマサラに居たころは知らなかったんだけどさぁ」
　わははっと笑うと、じゃあ早く食べようぜと言いながら席に着くサトシ。

良く見るとその彼の目の前には、お皿に乗ったお菓子。
あ、自分の分もあったのね。

「ま、全く……
サトシってば子供ねぇ～」

ちゃっかりしてるわ、と言いながらアタシも席に着く。

ふとデントを見ると彼は少し苦笑いをしていた。

――「どうやらイッシュのバレンタインと、彼の旅していた地域のバレンタインでは解釈の仕方が違うようだね」と後日デントが言ったのはまた別の話で――

アタシ達はサトシが作ったお菓子をしげしげと見つめる。

「これって何て言うお菓子？」

「これは前に旅をしてた時に出会ったお菓子で『森のヨウカン』って言うんだ。
森の洋館で売ってたらしいんだけど、そこ既につぶれちゃっててさー。で、むぐむぐ　とりあえず中に入ったら、もぐもぐ　そのレシピがあって、んで、そのレシピで作ったのがこれ。
んー、でも、タケシが作ったやつの方がうまかったな、うん。
あ、タケシって言うのは、この前まで一緒に旅してたやつで――……」

途中から我慢できなくなったのか、説明しながら自分で作った『森のヨウカン』を食べ始めるサトシ。
最後の方は口に頬張りすぎるもんだから、何を言ってるのかさっぱ

りわからない。
まったく、ほんと！　子供なんだからっ。
そう思いながらアタシはその『森のヨウカン』を一口食べてみる。
もぐもぐもぐもぐ。
「お、おいしい……！」
アタシは思わず感嘆の声を上げた。
この独特な色や形からは想像つかない様な、上品な甘さにアタシは驚く。
これをサトシが作ったなんて、なんか信じられないな。
「これは和風なスイーツだね。
う～ん。これはアン子と言われるものを使ったお菓子なんだよね、……へぇ。
不思議だ。スイーツアン子。ブラボーヨウカン！
これは是非そのレシピを教えてもらいたいものだねっ！
このヨウカンをうちの店の特別メニューに……案外クリームにも合いそうだし……」
デントはデントで何処かの世界にトリップしてしまったらしく、ヨウカンを仰々しく掲げて一人呟きまくっている。
＊＊＊＊＊＊＊
「あ～おいしかったっ！
サトシ、御馳走様でした！！」
アタシはそう言うと「それにしてもサトシが料理作れるなんて意外ね」と続ける。

「オレだってレシピさえあればこれくらい出来るってっ！」

照れ笑いをするサトシがなんだか可愛くて、アタシは思わず目を細めた。

「キバキバキ～っ！」

ポフィンとポロックというお菓子を食べ終えたキバゴは、お礼のつもりなのかぴょんとサトシの肩に飛び乗った。

「ん？　どうした？　キバゴ？」

サトシは肩に乗ったキバゴの喉を優しく撫でる。

「キバキバー」

そう言ってキバゴはサトシに手に持っていた荷物を手渡す。

「ん？　何？　オレに？」

サトシはサンキュ！というとかわいいラッピングの袋を受け取った。

「あーーーーっ！」

アタシはあまりの恥ずかしさに絶叫する。

そ、それっ！

昨日アタシが作った、その、あの　本命カレシにっていう

……チョコ！　じゃないっ！！

「な、なんだよ？　アイリス、急に大きな声だしてさぁ」
明らかに怪訝な顔をするサトシ。
「へ？！
いや、えっと、その、あのぉ……。
き、昨日町をぶらぶらしてたら、なんか手作りチョコ教室に誘われちゃって……。
ば、バレンタインって仲間にお菓子上げる日なんでしょ？！
ちょうど良かったから、みんなで食べようよっ！！」
――ちょっと苦しい言い訳だったけど、サトシは「アイリスの手作りかぁ」と呟くとおもむろにお皿に分け始める。
……さすが、鈍いわね、サトシって……。
「アイリスもなかなかやるじゃんっ！」
小さなハートのチョコをぱくりと食べると、サトシはにっと笑う。
「また作ってくれよ！」
そう言われて、アタシは「気が向けばね」とお姉さんぶって答える。
――小さなハートのチョコを口に入れると、甘いはずなのになんだかとっても苦くって、
ちょっと切なくて、苦しくて――。
それは、苦い苦い、大人の味のビターチョコレート。

後編（後書き）

一応話的には終わりなのですが、後日談を考えているので、敢えて『完結』にしてません。
そのうちＵＰすると思います。よかったら気長に待ってやってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1632r/

ビターチョコレート

2011年2月26日01時20分発行